

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：34523

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24603031

研究課題名(和文)江戸小袖にみられる立木文様とインド、インドネシア更紗の相関性についての研究

研究課題名(英文) Interrelation between the Tree Designs found in Edo-period Kosode, Indian Chintz and Indonesian Batik

研究代表者

さくま はな (SAKUMA, Hana)

神戸芸術工科大学・先端芸術学部・助教

研究者番号：00589202

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本の染織の文様・技術・文化的発達の背景をふまえながら、江戸小袖(女性用)にみられる「立木文様」の意匠を象徴性、造形表現、染織技法といった観点から考察し、その意匠の構成要素を明らかにした。また、江戸小袖の文様に影響を与えたといわれるインド更紗、そして、インド更紗の影響を色濃く受けたインドネシア更紗の意匠の特徴や構成要素を明らかにし、それらの関係性について考察した。また、本研究で得た知見をもつくりの現場へ還元することを目的に、樹木の表現様式をテーマにしたデザイン・ワークショップの提案を行った。

研究成果の概要(英文)：In this study, we examined tree designs found in Edo-period kosode (a type of kimono) for women in terms of symbolism, formal expression, and dyeing and weaving techniques, while keeping in mind the patterns and techniques of Japanese dyeing and weaving and background to its development, so as to clarify the components of the tree designs. We also studied the design characteristics and components of Indian chintz, which is believed to have influenced Edo-period kosode designs, and of Indonesian chintz heavily influenced by Indian chintz, to discern how they are interrelated. Furthermore, in order to return findings from this study to the manufacturing field, we proposed and organized design workshops on the theme of tree designs.

研究分野：アジアデザイン 美術 美術教育

キーワード：江戸時代小袖 インド更紗 立木文様 生命樹 染織 アジアデザイン テキスタイルデザイン アジア

1. 研究開始当初の背景

「樹木の表現様式」に関する研究は、これまで、代表者である佐久間と分担者である松本・黄・杉浦・齊木・馬場らで行った『「桜樹詠文字模様小袖」と18世紀インド生命樹更紗における立木模様/デザイン構成要素の比較を通じて』(神戸芸術工科大学紀要『芸術工学』学術リポジトリ 2011年採択共同研究 共同研究報告 2012)を始め、アジアの植物文様、江戸小袖とインド更紗における立木の意匠や構成原理については見解を深めてきた。

「小袖」における立木文様と「アジア諸国の立木文様」の関係性については、未だ体系化して論じられることは少ない。アジアの文様、図像文化、染織を専門とする本研究メンバーにとっても日本の立木文様と他のアジア諸国のものとの相関性については解明の余地があると考え、また、江戸小袖の立木文様をアジアデザイン観点から再解釈を行うことはデザイン領域の中においても意義のあることだと考える。

2. 研究の目的

日本の染織品における文様は他の工芸品に先駆けて、様々な植物文様をつくりあげてきた。とりわけ、江戸時代には、アジア各国の生命樹や植物文様に影響された文様の世界が展開した。

江戸小袖にみられる立木文様とインド更紗の繋がりについて示す具体的な事例としては、インド生命樹更紗を着物の形に仕立てた白地立木文様更紗下着(インド・コロマンデル海岸17-18世紀 松坂屋コレクション)や松竹梅の小袖をイメージしてつくられたと思われるインド更紗の室内用ガウン(House Gown no. 959 112 18世紀初め オンタリオミュージアム オランダ向けだと思われる)(注1)が挙げられる。インドネシア更紗についてもインド更紗とともに江戸時代に珍重され染織文化へ影響を与えた。

本研究では、このような日本の染織の文様・技術・文化的発達の背景をふまえながら、友禅小袖をはじめとする江戸小袖(女性用)における「立木文様」に着目し、象徴性、造形表現、染織技法などの観点から「立木文様」の意匠の諸要素を解明することを目的とする。同時に、友禅染の発達に貢献し、また江戸小袖の意匠にも影響を与えたといわれるインド更紗、そのインド更紗の中でも特有の立木文様の世界を繰り広げたことで知られる18世紀インド・コロマンデル海岸で作成されたヨーロッパ向けインド更紗(以下、インド生命樹更紗(4-1(2)参照))とインド更紗の影響を強く受けたインドネシア更紗、とりわけ、ジャワ北岸バティック((4-1(3)参照))における立木文様の意匠の特性・構成要素を明らかにし三者における生命観について考察する。

また、研究で得た知見をワークショップ(以下、WSという)提案・実施を通じてのものづくりの教育現場への還元を目指す。

3. 研究の方法

(1)立木文様の研究の方法:本研究では、小袖資料100点(注2)にみられる立木文様の造形的特徴を分析すると同時に、インド生命樹更紗50点(注3)と比較分析を行った。樹相、樹の種類、色彩表現、染織技法ごとに考察を行い、また、時代別の意匠の変遷、デザイン的要素についても考察した。

(2)デザインWSの実践の方法:立木文様についてのレクチャー、切り絵WS、シルクスクリーンWSの提案と実践、記録冊子の作成。

4. 研究成果

(1)江戸時代小袖・インド生命樹更紗・バティックにおける立木文様

①江戸小袖における立木文様の造形的特徴と染織技法

a. 樹相について:世界各地に存在する生命樹は、宇宙の中心軸を体現する左右対称の構図をもつものが多い。一方で、江戸小袖の立木文様は、寛文小袖の特徴である左腰の部分に余白を残しながら、右に重心を置く様式のものも多くみられることが分かった。こうした樹相の特徴を以下の6種類に分別した。

うねり型:S字形の幹、右裾、右腰、両袖へ伸ばす枝、左腰の部分に余白を残す。

幹省略型:籬などのモチーフを用いて背面をS字に区分し、小枝・花を籬などの間から覗かせる。

直立型:裾から肩に向かって直立。主に竹、享保期以降には、芒などにも用いられる。

草木型:裾や右腰から草木が茂る様子。

花束型:花かごや花束がS字を描く。

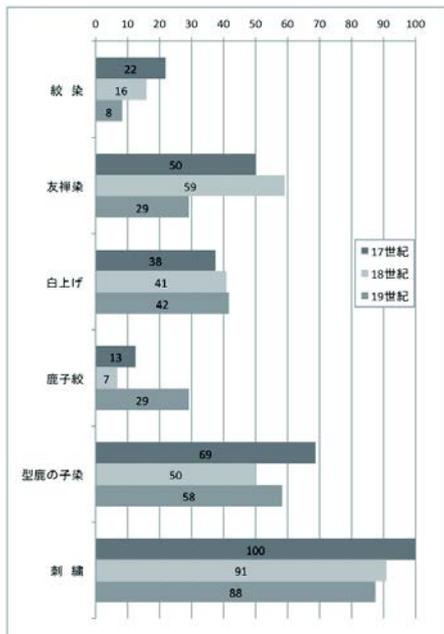
蔓木型:藤、枝垂桜、柳桜などが、肩から裾に向かって垂れる。S字形の構成に配置されることが多い。以上6種の中でも、うねり型はもっとも多くみられると同時に、立木文様の最も基本的な樹相であることが明らかになった。

b. 樹の種類:梅、桜、松、楓、竹の順に多く、他に桐、牡丹、橘、南天、椿、バラなど花咲く樹が多いことが明らかになった。また、藤、鉄線などの蔓木や、享保期以降には、菊、杜若、芒、楓忍草、葵、萩、笹、葎などの草木もこれに加わる。盆栽を愛するような視点で、花、花卉、枝が近距離から捉えられており、中国の様式にみられる理想化された植物文様とは異なる。江戸時代に普及した園芸の概念とともに、身近な植物への関心が高まったこととも無関係ではないと考える。

c. 文芸的要素:滝や流水、御所車、籬、御簾、透垣などの景観要素が立木文様に組み合わせ

せられている。和歌や漢詩、古典物語から抜粋した漢字や仮名文字が、大きく配置されている小袖がある。これは、中国文人の「詩書画三絶（詩書画三つに通じること）」という思想の影響で、その背景には寺子屋による習字・古典文学などの教育が町人の間に定着したことや、文化的な教養が社会的ステータスとなっていたことが挙げられる。

d. 色彩表現と装飾技法：天和3年（1682）に衣服制限が出され、金紗・縫・惣鹿の子が禁止されると（注4）、禁令の制限内で様々な加飾の技法の組み合わせが行われた。



小袖技法別集計 作成：曾和英子

刺繍：立木文様の主流となっている加飾技法。17世紀は100%、18世紀は91%、19世紀は88%の立木文様小袖に刺繍が使われていることが明らかになった。主に金糸と紅糸、それに萌黄や緑、紫の絹糸がこれに加わる。

鹿の子染：糸で生地を強く括ることにより「粒」や「しわ」を作る防染方法。「総鹿の子禁止令」（天和3年（1683））後は、型染めによる鹿の子文様染が行なわれた。18世紀になると、鹿の子絞を中心とした文様に代わって、型鹿の子染が増加する。

絞染による染分け：6-7世紀日本にすでに始まっていた最も古い染色技法のひとつ。友禪染が普及する前には、染め分けや文様染めとして使用されていた。輪郭を量かすことができ、瀧のしぶきや雪を被った立木文様などに用いた。

型鹿の子染：奢侈禁止令後、型鹿の子染（摺疋田、摺匹田）が人気のあった鹿の子絞文様に代わり発達を遂げた。友禪染や刺繍と組み合わせ、日常礼服に用いられた。17世紀末に最も多く71%、18世紀と19世紀は50%前後に減少。友禪染で立木文様が描かれることが増

えたことによると思われる。

友禪染による彩色：17世紀には48%、18世紀には58%、19世紀には29%の立木文様に友禪染が使われていることが分かった。19世紀には、立木文様が婚礼服などの特別礼服に限定されるようになり、それに合わせて彩色技法も婚礼服用の鹿の子絞や刺繍が使われるようになったことで友禪染のものが減少。

白上げ：絞染や友禪染で、文様の一部分をあえて白く残したままにすることをいう。17世紀から19世紀にかけて約50%の文様に白上げが用いられ、そのデザイン的役割は時代によって変化する。18世紀中期までは白・紅・黄系統の明るい生地に、白上げがわずかに添えられるのみであった。18世紀後期になると、萌黄、鉄海老、納戸、紺、黒など濃い色の生地に白上げを活かした文様表現が行なわれるようになった。



左：黄地桜樹に文字模様小袖 江戸時代中期 女子美術大学美術館所蔵。出典：大森達次編集、『KIMONO 小袖にみる華・デザインの世界』、展覧会図録、女子美術大学美術館、2006、p.39

右：Rosemary Crill, Chintz: Indian Textiles for the West, Victoria & Albert Museum 2008, p.40

②インド生命樹更紗における立木文様の造形的特徴と染織技法

本研究では、東インド会社の影響化にあった18世紀インド・コロマンデル海岸でつくられたヨーロッパ向けの室内装飾用の立木文様更紗を「インド生命樹更紗」と総称する。装飾性に富んだ意匠が特徴で、特定の信仰に基づくものではないが、構図や樹相、幹の表現にアジアの生命樹との類似性が認められることからそのように称することとする。

インド生命樹更紗の特徴としては、背景が白い（漂白した綿布）（注5）、画面中央、天地を結ぶように異なる花を咲かせた大きな樹が配置されている、中国の須弥山、または、ペルシャの装飾にみられるような豊富な水源を象徴する花瓶を用いた大地の表現がみられること、そして、以下の示す9種類の樹相に分類されることが挙げられる。これらは、ヨーロッパ人の趣味嗜好に沿ってインド職人らが作成した。異なる文化圏の造形様式が融合し独特の異国情緒を醸し出している。

a. 9種の樹相と異文化のデザイン要素

樹相の分類としては、杉浦康平がアジアの

生命樹の典型例として導き出した4種のうちの3種、直立型樹相（本研究では直立型と記載）、うねる樹相（うねり型）、絡み合う樹相（絡み合い型）（注6）に新たに6種加えた下記9種である。

うねり型：仏教遺跡サーンチー塔門にみられる樹相、インドの国樹で生命樹であるとされるベンガル菩提樹の苗木や蛇などを連想させる。江戸時代立木文様小袖で示したうねり型に類似している。

直立型：宇宙軸、ムガル朝の装飾、ペルシャの生命樹文様に多用される。バロック建築の飾り柱を連想させるものもある。

絡み合い型：豊穰と再生を象徴する蛇の交尾を連想させるものや、樹に蔦がからみあっているものを含む。

糸杉型：ゾロアスター教の聖なる木を彷彿させる。マスリパタム産のペルシャ向けのインド更紗に多くみられる。ヨーロッパ向けのものでは、18世紀のものは画面の四隅に小さく配置されていたが、19世紀には、糸杉のようなシルエットを画面上に大きく配置したものがつくられた。

交差型：細い枝先が連続的に交差するもの、または、ひとつの楕円形を描くもの。キリスト教の装飾を彷彿させる。

角ばり型：中国の花鳥画の左右非対称な樹を模したもの。ロココ様式と中国趣味とが融合したシノワズリの様式で表現される。

連立型：同じまたは異なる種類の樹木が立ち並ぶ様子。

変形型：インド生命樹更紗の4つの特徴のいくつかに当てはまりながらも上記の樹相に当てはまらない樹相。上下左右対称の樹相もここに含まれる。

混合型：上記の変形型樹相にバロック調の装飾、エンブレム、ペルシャ絨毯に多用されるボテ文様、アラベスク、ヘラティ文様などが加えられたもの。イタリアンレースや英国のクレウエル刺繍のデザインの影響がみられる場合もある。

これら9種の樹相に共通する特徴として、樹を真横から俯瞰した幹の形に強い拘りを感じる構図であること、江戸小袖とは異なり、幹が省略・分断されることがなく上から下まで念入りに描かれていることが挙げられる。

b. 樹の種類

樹の種類については、小袖が四季折々の実在の樹を描いたのとは対照的に椰子、モクレン、竹など特定できる樹種もあるものの、樹種が特定できないものも多い。一本の樹に異なる花を咲かせることが多く、その場合も、バラ、菊、アネモネ、チューリップ、ボタン、カーネーション、アカンサスの葉、笹の葉など特定できるものもあれば、パルメットや想

像上の花も多くみられることが分かった。

c. インド生命樹更紗の染織技法

インド生命樹更紗には、一般的に上質な細めの綿糸で織った平織が用いられる。インド独自の媒染剤を用いた方法で染められるのが大きな特徴である。色は、赤、紫、藍、黄、オレンジ、緑、黒などの濃淡で色展開している。さらに、カラムと呼ばれる絵付けの木製筆の太さや地模様の密度に変化をつけ巧みに異なる色や風合いをだしている。布を絵の支持体のように見立て、カラムを片手に自由に線を引きことから、友禅染と同じく絵画的な表現が可能であり、これが様々な立木の表現を創り出したといえる。なお、江戸小袖における染織技法と立木文様には特筆に値する相互関係があったのに対して、インド生命樹更紗において平織の綿布、これらの色の使用に関しては、その意匠に著しく変化をもたらす程の時代による変化はみられない。

③ジャワ北岸バティックにおける立木文様

貿易路に近いインドネシア、ジャワ島北岸地方では、19世紀以降にはなるが、インド更紗の様式をはじめ、中国、ヨーロッパの様式の影響を強く受けた植物文様のバティックがつくられていた。インド生命樹更紗が異文化を巧みに取り入れたものであったように、ここでも多様な文化の様式を取り入れた色彩豊かなバティックがつくられており、代表的なものとして、カロリナ・フォン・フランクモン (Carolina Josephina von Franquemont) の生命樹をイメージした花樹のバティックがある。さらに、その後、エリザファンツァイレン Eliza van Zuylen によるデザインのブケタンと呼ばれる花束文様のバティックが作成され、それが人気を博し、ペカロンガンを代表する定番の文様になったという事例がある。（注7）

④立木文様に含まれる生命観

江戸小袖とインド生命樹更紗・ジャワ北岸バティックの立木文様には、共通して「生命」への畏敬の念といったものがその意匠に込められていることが明らかになった。

a. 「永遠の生命」：江戸小袖には、「長寿」を願う松竹梅の他にも菊水文様など古代中国の神仙思想「長生不老」を受け継いだものが多く存在する。

b. 「豊かな生」への願い：三者には、大輪の花を数多く咲かせているという共通点がある。江戸小袖は、常緑の「生命力」を現す松にも大きな花を咲かせるなど、「花咲く」ことへの強い拘りは、現世で豊かに生活することを望む江戸町人の願いが込められていると考える。

c. 「生命再生」と水の存在：インド生命樹更

紗にはペルシャ絨毯のゴルダニ文様—豊富な水源を象徴した花瓶—が多用されている。江戸小袖にも瀧や流水は多用され、樹木のエネルギーの流れといったものを彷彿させる。

d. 複数の装飾の様式の併用「生命豊穡」の表現：江戸小袖の場合、複数の染織技法の使用や、「詩書画」の複数の要素を一つの画面に配する、インド生命樹更紗・ジャワ北岸バティックの場合には、幾つもの異なる造形様式を立木文様に盛り込むなど、その文化的範疇は異なるものの、三者とも多様な文化への強い関心があらわされている。これらはいずれも「生命の豊穡」への喜びの表現であり、「生命」の表現形態の一つと言えるであろう。

e. うねる樹相の「生命力」：江戸小袖・インド生命樹更紗・ジャワ北岸バティックの立木文様には、さまざまな樹相が存在するが、うねり型が最も多くみられる。この樹相は、「雪や風にも負けない力」と「上昇する水」のエネルギーを内在した強い「生命力」の象徴だと考えられる。

⑤まとめ

江戸小袖の立木文様の意匠を支える要素を以下の3点にまとめた。

モチーフに見られる四季の表現：桜のモチーフは梅より少ないものの、中国文化の影響が強かった古代日本の文様に比べると、桜文様の割合が大きく増加している。それはまさに近代になって花の写実的な描写を装飾目的に用いるようになった結果であることが伺える（注8）。なお、橘や楓などその他の日本固有の樹種をモチーフにした文様も加わっている。

a. 町人らが、園芸、いけばな、旅行、書道などの趣味もつようになり、技巧をこらした優美で繊細な花・草・樹木の染織・工芸品を身近に楽しむ風潮がいつそう強まった。現実世界の自然を観察する眼差しにも変化が生まれ、写生・写実の作風を生み、そして、文様にも写実性が求められるようになった。

b. 文学意匠：小袖に詩歌の文字が立木文様と組み合わせられるようになったのは、貞享から元禄ごろである。満開の花を咲かせた立木が両肩と袖へ伸び、枝先に文字が配される。背面の上部と胸元に、古典詩句から抜粋した文字が刺繍で表現される。このような文学意匠は季節感と文学的教養を伝える役割を担うもので、インド生命樹更紗、ジャワ北岸バティックの立木文様には見られない。

c. 多様な技法の併用、多彩な色彩表現：複数の技法の併用によってつくられる重層的な構造（糸目糊で縁取られた花卉に色挿しや花は糊置きによる白上げでその花の輪郭のみを朱色で描きおこす等）が意匠に立体感を与える。こうした技法の併用は、江戸時代に始

まったものではないものの、軽やかさのある染めや型鹿の子染に紅・金・萌葱などの刺繍を加えるといった動きのある視覚的効果を狙った技法の選択がなされ、江戸中期の気張らない華美の世界を感じる。

(2) アジアにおける樹木の表現様式に基づく造形学習を促すデザイン・ワークショップの実践と提案

本WSは本研究の成果をものづくりの場に還元することを目的に考案したものである。アジア諸地域によって造形的に共通性がみられる樹木の表現形態に着目し、「切り絵」と切り絵を応用した紙版による「シルクスクリーンプリント」による造形活動を行うものである。日本、インドをはじめとするアジア諸国で樹木がどのように様式化されてきたかを学ぶことによって、身近にあるものや自然物から自分なりにカタチを導き出し造形表現に取り入れる力を育てることを到達目標としている。期待できる学習効果としては、身近な自然を観察する力、アジアの植物文様・文化的背景の理解を深める、カタチ・抽象化・左右対称・非対称・配色・組み合わせなどの基本的な造形の理解を深める、などが挙げられる。

WSの内容としては、作業前に立木文様についてのレクチャーを行い、江戸小袖とインド生命樹更紗における立木文様の類型や構図などを学んだ上で造形の際の着想源とする。本WSを提案するにあたって、本研究メンバーが所属する神戸芸術工科大学の有志学部生を対象に実際にWSを実施した。以下がその内容である。

◎切り絵WS（7月に3時間セッション1回1班4名での共同制作）：上記レクチャー後、オリジナルの花模様を折り紙でつくり、ある程度数が集まったところで立木の形状、種類、配置、装飾物など話し合いながら作り上げる。台紙には4人で作業するのに適したA0サイズの紙を使用した。

◎シルクスクリーンプリントWS（11月に3時間セッション2回）1100x1500cmと1100x3000cmの布に班ごとに手作業で作成した紙版を用いて立木文様をプリント。

ワークショップ作品展（12月）および講評会を実施した。

本WS実施の成果としては（1）本WSを介してもものづくりの現場とアジアの植物文様研究とを繋ぐ具体的な方法を提案することができた、（2）本WSだけではなく、対象者を小学校高学年以上や中学生以上に拡大したWSの提案、が挙げられる。また、冊子を日本語・英語併記にしたことで、今後、海外でのWSの取り組みにも繋がればと考える。



ワークショップ作品展の様子

注釈

1. K. B. Brett, 'The Japanese Style in Indian Chintz Design', "Journal of Indian Textile History", No 5, 2nd ed, D. S. Mehta on behalf of the Calico Museum of Textiles by Sarabhai Foundation, 1996, p. 47.
2. 収蔵元は、松坂屋 27 点、女子美 20 点、田畑 17 点、千総 10 点、丸紅 5 点、京都国立博物館 4 点、奈良県立美術館 3 点、東京国立博物館 2 点、遠山記念館 2 点、国立歴史民俗博物館 2 点、ボストン美術館 2 点、徴古裳 2 点、京都きもの株式会社 1 点、フィラデルフィア美術館 1 点、大手前大学 1 点、護国寺 1 点、合計 100 点である。
3. 収蔵元は、ビクトリア&アルバートミュージアム 19 点、ロイヤルオンタリオ博物館 19 点、オーストラリア国立博物館 3 点、メトロポリタン美術館 3 点、ウインター・ウルミュージアム 1 点、岡田コレクション 1 点、クーパー・ヒューイットミュージアム 1 点、女子美術大学美術館 1 点、TAPI コレクション 1 点、東京国立博物館 1 点、合計 50 点である。
4. 京都国立博物館、花洛のモード きもの時代、京都国立博物館、2001 年、p. 442
5. John Irwin, 'Indian Textile Trade in the Seventeen Century', "Journal of Indian Textile History", No 1, 2nd ed, Nissim Ezekiel for the Calico Museum of Textiles", 1995, p. 14.
6. 杉浦康平、『生命の樹・花宇宙』、万物照応劇場、NHK 出版、2000 年、pp. 78-81.
7. クンプル（メンバー）編・著、『ジャワ更紗の旅 Batik』、クンプル、2005 年、p. 14.
8. 今永清二郎、『日本の文様 4- 桜』、小学館、1986 年、p. 156.

5. 主な活動等

〔トークイベント〕(計 1 件)

佐久間 華、曾和 英子、江戸小袖・更紗にみる花・樹・カタチ 2014 年 8 月 8 日、京都市男女参画センターウィングス京都

〔展覧会〕(計 1 件)

佐久間 華、曾和 英子、馬場 雅恵、デザイン・ワークショップ「アジアの植物模様ワークショップ作品展」、参加者による作品の展示、2014 年 12 月 1 日~15 日、エスパース、神戸芸術工科大学

〔冊子〕(計 1 件)

佐久間 華、曾和 英子、馬場 雅恵、デザイン・ワークショップ「アジアにおける樹木の表現様式に基づく造形学習」、16 ページ、佐久間研究室、神戸芸術工科大学

主な発表論文等

〔学会発表〕(計 2 件)

①佐久間 華、18 世紀インド生命樹更紗の造形原理を解明する試み、芸術工学会、口頭発表および査読付き報告、2013 年 12 月 7 日、国際デザインセンター、名古屋

②曾和 英子、江戸時代小袖に見られる立本文様の表現特性、芸術工学会、口頭発表および査読付き報告、2013 年 12 月 7 日、国際デザインセンター、名古屋

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐久間 華 (SAKUMA, Hana)

神戸芸術工科大学・先端芸術学部・助教
研究者番号：00589202

(2) 研究分担者

杉浦 康平 (SUGIURA, Kohei)

神戸芸術工科大学・アジアデザイン研究所・名誉教授
研究者番号：00226432

馬場 雅恵 (BAMBA, Masae)

神戸芸術工科大学・デザイン学部・教授
研究者番号：00249202

黄 国賓 (HUANG, Kuo-pin)

神戸芸術工科大学・デザイン学部・准教授
研究者番号：50441382

曾和 英子 (SOWA, Eiko)

神戸芸術工科大学・アジアデザイン研究所・客員研究員
研究者番号：80537134

齊木 崇人 (SAIKI, Takahito)

神戸芸術工科大学・芸術工学研究科・教授
研究者番号：90195967

松本 美保子 (MATSUMOTO, Mihoko)

神戸芸術工科大学・アジアデザイン研究所・名誉教授
研究者番号：90219519